

第8章 文化財の一体的・総合的な保存と活用

1. 関連文化財群

(1) 関連文化財群の設定の考え方と目的

関連文化財群とは、地域の多種多様な文化財を、地域の歴史文化の特徴から導かれるテーマとそれによって紡がれる歴史的・地域的な関連性（ストーリー）に基づいて、一定のまとまりとして捉える考え方です。文化財をまとまりとして扱うことで、指定・未指定を問わず、あるいは文化財保護法の類型外の文化財も関連文化財群を構成する要素として位置付けることが可能となり、相互に結び付いた文化財の多面的な価値や魅力を発見することができます。

3章では、本市の歴史文化の特徴として、「富士のふもとで」という言葉を枕詞に「暮らす」、「戦う」、「行き交うヒトとモノ」、「災害とともに生きる」、「作る」、「祈る」、「受け取るめぐみ」という7種類の視点でまとめました。それぞれの視点には、歴史的・地域的に共通する文化財から構成される関連文化財群と、関連文化財群によって語られる、本市の歴史や文化を表象する以下の15のテーマが存在しています。

[富士市の歴史文化を表象する15のテーマ]



- ・浮島沼（浮島ヶ原）周辺の古墳文化
- ・浮島沼（浮島ヶ原）周辺の生業と景観
- ・富士山南麓の古墳文化とその後の地域開発



- ・紙のまち富士



繰り広げられた戦い

- ・頼朝と曾我兄弟～源平合戦前後の富士地域～
- ・今川・武田・北条の戦い



- ・富士山信仰とかぐや姫



- ・文化が交わる縄文時代
- ・近世東海道と宿場・間宿
- ・富士川舟運と渡船



- ・富士の茶



災害と生きる

- ・噴火とともに生きた人々
- ・安政東海地震と幕末の国際交流
- ・暴れ川・富士川を治める
- ・海が迫る！高潮と宿場町

これらのストーリーに基づく関連文化財群を活かした調査研究・整備・普及啓発・情報発信といった各種取組を推進することで、身近な文化財に対する地域の人々の理解や関心を深めるとともに、地域の人々のみならず、市内外へと文化財の魅力を発信し、まちづくりや地域活性化のための地域資源として活用していくことが可能となります。

(2) 重点的に取組を推進するテーマと関連文化財群

前節で取り上げた 15 のテーマに基づく関連文化財群は、本市の歴史文化の特徴を示すものですが、関連文化財群によって、構成文化財群のさらなる調査が必要なもの、ストーリーの周知が必要なもの、各種事業を実施するための体制づくりが必要なもの、すでに具体的な事業の実施が可能なものといった形で、それぞれの状況が異なります。

そこで、本計画の計画期間である令和 4 (2022)年から令和 13(2031)年にかけては、構成する文化財が十分に把握されていることに加え、それに関する情報発信がおこなわれており、文化財を活かした各種取組を実施するための環境が整っている「頼朝と曾我兄弟～源平合戦前後の富士地域～」、「富士山信仰とかぐや姫」のストーリーを抽出し、それに基づく関連文化財群については、重点的に保存・活用のための取組を推進します。また、その他のテーマについては次期計画にてストーリーに基づく関連文化財群を設定します。

①頼朝と曾我兄弟～源平合戦前後の富士地域～

[概要]

治承 4 (1180) 年、都から伊豆に流されていた源頼朝は、以仁王の平氏追討の令旨を受けて挙兵すると、都から派遣された平氏軍と富士川を挟んで対峙しました。水鳥が一斉に河沼を飛び立つ音を源氏軍の夜襲と誤認して、一太刀も交えず平氏軍が撤退したという史話は有名です。富士川の合戦時、源氏軍は富士川東岸の富士市域に布陣しており、市内各地に頼朝や源氏方の武士の史話が史跡とともに残されています。

また、建久 4 (1193) 年、頼朝が富士山の麓で盛大に実施した巻狩り(狩猟)の際に、日本三大仇討ちの一つ、曾我兄弟の仇討ちという事件が起こります。この事件は、伊豆にある工藤祐経の領地をめぐる、工藤祐経と曾我兄弟の祖父・伊東祐親の所領争いに始まります。この争いの中で、伊東祐親の嫡子、つまり曾我兄弟の父・伊東祐泰が工藤祐経によって殺されてしまいます。当時幼かった曾我兄弟は静かに闘志を燃やしながら成長し、兄の十郎祐成が 22 歳、弟の五郎時致が 20 歳の時、仇討ちを遂げました。工藤祐経を討ち取った後、十郎はその場で討ち取られ、五郎は捕縛されて鎌倉へ護送される途中、鷹ヶ岡で首をはねられました。この鷹ヶ岡が、現在の富士市鷹岡の地であるといわれ、兄弟にまつわる史跡がこの地に数多く残されています。

このように、「頼朝と曾我兄弟～源平合戦前後の富士地域～」は、平安・鎌倉時代から今日



まで伝承されてきた史話と、それにかかわる史跡から構成される関連文化財群です。

[関連する文化財一覧]

指定種別	名称と概要
有形文化財 (市) ※未指定 物件含む	<small>じつそうじ</small> 實相寺 源頼朝が平家打倒の祈願をおこなったと伝えられる日蓮宗の寺院（もとは天台宗）。境内には、仁王門の木像仁王像（市指定有形文化財）、一切経蔵の木彫七福神（市指定有形文化財）、日蓮の岩本一切経蔵への入蔵伝説と深く関わる宋版と天海版の一切経（市指定有形文化財）を収めた一切経蔵、江戸時代まで遡ることができる石造文化財群などが所在する。
天然記念物 (市)	<small>よこわりはちまんぐう</small> 横割八幡宮 源頼朝が平家軍の追討を願って参拝し、矢と馬を奉納したとの伝承が伝わる。※境内のクスノキが市指定文化財。
その他 (史話と伝承) (未指定)	<small>ひよしじんじゃ</small> 日吉神社 源頼朝が平家打倒のために挙兵した時から従っている家来、鮫島四郎宗家を祀る神社。宗家は、富士川の合戦の時、地元出身者として道案内などをつとめたと考えられている。
その他 (史話と伝承) (未指定)	<small>へいけごえ</small> 平家越 水鳥の飛び立った音に驚いた平家軍が逃げ帰った場所とされている。近くには「平家越」という地名も残っている。富士川合戦の当時、富士川には多くの支流があり、平家越周辺も富士川の河原であったと考えられている。
その他 (史話と伝承) (未指定)	<small>わだじんじゃ</small> 和田神社 源平の合戦の際、源氏軍の和田義盛は源頼朝に現在の今泉村周辺の警備を命じられたといわれている。のちにその土地を和田と呼び、義盛を守護神として建立したとされる。
その他 (史話と伝承) (未指定)	<small>よびこざか</small> 呼子坂 源氏軍が笛（呼子）を吹いて兵を集めた場所とされる。
その他 (史話と伝承) (未指定)	<small>いもりせんげんじんじゃ</small> 飯森浅間神社 かつては「飯森明神」と呼ばれていた。その名の由来は、源氏軍が合戦のための食糧をここに置いて、それを兵が守っていたという伝承に由来する。
その他 (史話と伝承) (未指定)	<small>よろいがふち</small> 鎧ヶ淵 源頼朝がこの淵の岩に鎧をかけて体を洗ったと伝えられる。
その他 (史話と伝承) (未指定)	<small>みさきじんじゃ</small> 御崎神社 源氏軍が陣を置いたとされる場所の一つ。かつては物見の松という老木があったとされる。
その他 (史話と伝承) (未指定)	<small>たきがわじんじゃ</small> 滝川神社 源頼朝が平家軍の討伐を願って参拝したとされる神社。近年まで祭礼の際には、草競馬がおこなわれていた。
その他 (史話と伝承) (未指定)	<small>かんちくせんげんじんじゃ</small> 寒竹浅間神社 源氏軍が本陣を置いた場所の一つとされる。
その他 (史話と伝承) (未指定)	<small>じんがさわ</small> 陣ヶ沢 源氏軍が陣を置いた場所とされる。見晴らしがよく、晴れた日には駿河湾・伊豆半島まで見渡せる。

指定種別	名称と概要
その他 (史話と伝承) (未指定)	<small>やがわ</small> 矢川 源頼朝がここで矢を洗ったとする。現在も愛鷹山の湧水を源とする澄んだ水が流れ、水神が祀られる。
その他 (史話と伝承) (未指定)	<small>まげざわ</small> 万騎沢 平家軍が源氏軍の様子を探っていた際、小競り合いが起き、双方の兵が落ちた沢と伝えられる。現在でも小字名が残る。
その他 (史話と伝承) (未指定)	<small>ごんげんはら</small> 権現原 源氏軍がかがり火を焚いた場所と伝えられる。現在でも小字名が残る。
その他 (史話と伝承) (未指定)	<small>そが はちまんぐう</small> 曾我八幡宮 曾我兄弟を祀る神社。神社が所蔵する「曾我八幡宮略縁起」によれば、曾我兄弟の仇討ちの意思に感心した源頼朝が、家臣の岡部泰綱に命じて建立したとされる。戦国時代には一度消失したとされるが、江戸時代に伊那忠次により再建され、江戸時代末期に現在地へと移されている。
その他 (史話と伝承) (未指定)	<small>ごろう くびあらい いど</small> 五郎の首洗い井戸 仇討ちを果たしたものの、捕えられた曾我兄弟の弟、五郎時致は、鎌倉への連行途中に現在の鷹岡の地で首をはねられたとされる。この場所はその首を洗った井戸とされている。現在は水が枯れているものの、かつては水がわき、五郎の命日には水が赤く染まるとされ、念力水と呼ばれていた。
天然記念物 (市)	<small>そがでら ふくせんじ</small> 曾我寺 (福泉寺) 正式な名称は福泉寺であるが、本堂には曾我兄弟の木像や位牌が安置され、境内には兄弟の墓があることから、曾我寺と呼ばれる。かつては、兄弟が仇討ちを果たした5月28日の前後に曾我兄弟の供養祭が盛大に行われていた。また、江戸時代には東海道を行き交う旅人が訪れた名所の一つでもあった。※境内のカヤ・シイが市指定文化財。
その他 (史話と伝承) (未指定)	<small>ひめみやじんじや</small> 姫宮神社 曾我兄弟の弟、五郎時致が思いを寄せていた化粧坂の少将を祀る場所。
その他 (史話と伝承) (未指定)	<small>たまわたりじんじや</small> 玉渡神社 曾我兄弟の兄、十郎祐成の恋人、虎御前を祀る神社。この地を訪れた虎御前が兄弟の仇討ちの成功とともに、兄弟が命を失ったことを知り、兄弟の冥福を祈った場所に建立されたとされる。神社から少し離れた場所には、虎御前の腰掛石・がっかり橋といった史跡も残る。
その他 (史話と伝承) (未指定)	<small>そがどう</small> 曾我堂 曾我兄弟の弟・五郎時致が祀られている場所。この地域にかつて所在した善得寺の住職、竺帆和尚の前に、成仏を願う五郎が現れたことから、五郎の木像を彫り、祠を建てて供養したとされる。
その他 (史話と伝承) (未指定)	<small>ふくせんじ やなぎしま</small> 福泉寺 (柳島) 富士市内には、福泉寺という寺が、曾我寺以外にも2か所存在する。曾我兄弟の兄、十郎祐成の恋人、虎御前は、亡くなる直前に、兄弟の供養のために、薬師如来の像を福泉寺(曾我寺)に奉納することを願ったが、使者が間違えて市内柳島の福泉寺に像を届けたとされる。
その他 (史話と伝承) (未指定)	<small>そが ばていし</small> 曾我の馬蹄石 源頼朝が行った富士の巻狩りに宿敵・工藤祐経が参加していることを聞きつけた兄弟は、祐経を追いかけて鷹ヶ丘(現鷹岡)まで来た。兄弟は、道端にあった石に馬の足をかけ、祐経がいる上井出(現富士宮市)の方をにらんでいた時に、この石に馬の蹄跡がついたといわれている。

指定種別	名称と概要
有形文化財 (未指定)	富士山かぐや姫ミュージアム収蔵資料 東海道名所図会 富士川水鳥劫平家大軍や曾我物語図会をはじめ、曾我物語や源平合戦がモデルとなった浮世絵や資料が収蔵されている。
その他 (史話と伝承) (未指定)	念力橋 五郎時致の首洗い井戸に湧いたとされる念力水に因んで命名された橋。
その他 (史話と伝承) (未指定)	がっかり橋 虎御前が兄弟の死を知った際にいたとされる橋。
その他 (史話と伝承) (未指定)	虎御前の腰掛石 曾我兄弟が仇討ちを遂げるために曾我の里を旅立った後、安否を心配して後を追った虎御前が、仇討ちが果たされ、兄弟は命を失ったことを知り、その場で泣き崩れた際に腰をおろしたとされる石
その他 (史話と伝承) (未指定)	曾我道 「駿河国富士山絵図」にみられる街道。その道は、東海道の本市場から、曾我寺や兄弟の墓に至っており、江戸時代には、これらのゆかりの地を目指す旅人が一定数存在していたことがうかがえる。

[関連文化財群配置地図]



© OpenStreetMap contributors

●関連文化財群に関する課題と方針

関連文化財群「頼朝と曾我兄弟～源平合戦前後の富士地域～」に関しては、令和3年の時点で、すでに観光関係団体を中心に、構成文化財を紹介したマップの作製や、スタンプラリー、ガイドの養成の準備が進められています。しかしながら、現地を案内してくれる人が限られているといったことや、説明板の老朽化や不備、文化財へのアクセス方法が限られていると

いった課題があり、安定して市内外の人々の来訪を受け入れ、本市の文化財を活用したまちづくりへとつなげていく体制が十分に整えられているとはいえません。

そこで、本関連文化財群では、多様な関係者が参画する富士市文化財保存活用地域計画協議会で聴取した意見に基づきながら、商品展開の支援や観光ガイドの育成、看板の整備、地域での祭りやイベントの支援といった取組を通じて、頼朝と曾我兄弟に關係する文化財の保存・活用を進めます。

●関連文化財群に関して講じる措置

関連する措置の事業番号	事業名	取組主体					財源	取組年度		
		市民	所有者	団体	学識者	行政		前期 令和4～7 2022～2025	中期 令和8～10 2026～2028	後期 令和11～13 2029～2031
1	富士市文化財保存活用協議会の開催	○	○	○	○	○	市	← 2022-2026 →		
	多様な関係者の参画のもとで、関連文化財群に関する取組について推進する。									
49 50	源平合戦や曾我兄弟を題材にした商品展開の支援			○		○	市	← 2022-2026 →		
	源平合戦や曾我兄弟を題材にした商品の展開に関する支援（グッズのブランド化・販路開拓）を実施し、文化財を活用した商品展開のスキームを確立させる。									
54	源平合戦や曾我兄弟のストーリーを伝える観光ガイドの育成	○		○		○	市	← 2022-2026 →		
	源平合戦や曾我兄弟ゆかりの地を案内する観光ガイドを育成する。									
65-1	源平合戦や曾我兄弟ゆかりの地における看板整備			○	○		国市	← 2022-2026 →		
	源平合戦や曾我兄弟ゆかりの地における統一された看板の整備をおこなう（多言語）。また、看板には情報提供アプリへのコードを記載する。									
52-1	地域で実施する源平合戦や曾我兄弟に関連する祭り・イベントへの支援	○		○		○	市	← 2022-2026 →		
	地域で実施されている曾我行列などのイベント等への支援を実施する									
64-1	ストーリーや構成文化財の情報をスマートフォン等で体感できるアプリの制作			○		○シ	国市	← 2022-2026 →		
	源平合戦や曾我兄弟のストーリーや構成文化財の情報・映像について、スマートフォンを看板などに掲示されたコードにかざすと表現することができるようなアプリの開発を進める。									
37	周辺市町との共同事業の実施					○	市	← 2022-2026 →		
	源平合戦や曾我兄弟のストーリーを共有する周辺市町と共同して講演会やシンポジウムを開催する。									

※シ：シティプロモーション課

②富士山信仰とかぐや姫

[概要]

「1人の翁が竹の中から光輝く小さな女の子を見つける。」

運命的な出会いから始まり、不死の薬を富士山の山頂で燃やすという話で結ばれる竹取物語。平安時代に成立した源氏物語の中では、竹取物語を「物語の出で来初めの祖」としています。長い歴史を持つ古典作品でありながらも、そのストーリーは色あせることなく、日本のみならず、多くの言語に翻訳され、世界中の人びとを魅了し続け、語り継がれてきました。また、竹取物語は、世界文化遺産「富士山」のイメージを世界中へと発信している重要な物語でもあるのです。

しかし、富士山の南麓では、広く知られた竹取物語とは異なり、月ではなく富士山へと帰るといふ、他に類をみない独特な特徴を持つ、以下のようなストーリーが古くから語り継がれてきました。

-
- ①今からおよそ 1200 年前、富士山の麓の乗馬の里という所に、鷹を愛するおじいさんと、犬を愛するおばあさんが住んでいました。おじいさんは竹で箕を作っていたので、「作竹の翁」と呼ばれていました。ある日、おじいさんは、竹林の中で、小さな赤ちゃんを見つけました。おじいさんは不思議なことだと思いましたが、家に連れて帰り、おばあさんと大切に育てました。
 - ②赤ちゃんはすくすくと育ち、国中に並ぶものの無いほどの美しい娘になりました。娘はいつも良い香りがして、その体からは神々しい光が放たれていました。その光で辺りは夜でも昼間のように明るく輝いていたので、娘は「赫夜姫」と呼ばれるようになりました。娘が16歳になったころ、后探しをおこなっていた帝の使者がおじいさんの家に宿をとり、光を放つ姫と対面した役人は、その美しさに大変驚き、帝の后にふさわしい娘であることを伝えに都に戻っていったのです。
 - ③使者が去った後、姫はおじいさんとおばあさんに、自分は帝の后にはならず、富士山の洞穴へと入るつもりであることを伝えました。当時、誰もが畏れて登らない富士山へと去るということを聞いたおじいさんとおばあさんは嘆き悲しみますが、姫の意思は変わらなかったのです。姫が富士山へと登るといふうわさはあつという間に広がり、別れの日にはたくさんの人びとが集まりました。集まった人びとは姫との別れを惜しんで涙を流し、声をあげて泣きました。人びとの涙は川になり、その川は「憂涙川（潤井川）」と呼ばれるようになりました。
 - ④このころの富士山は、神仏の宿る畏れ多い山とされ、近く人はいませんでしたが、別れを惜しむ人びとは姫を追って富士山に登っていきました。しかし、姫が中宮八幡堂という場

所に着いたとき、後ろを振り返り、追ってきた人びとに「みなさんとはここでお別れしなければなりません」と声をかけ、おじいさんと別れの歌を交わしました。そして、さらに上へと登っていきました。姫はやがて、山頂にある釈迦岳の近くの大きな岩にあるほら穴に入っていました。実は、かぐや姫は人びとを救うためにあらわれた富士山の神様・浅間大菩薩だったのです。それからは、かぐや姫の導きにより、男性は頂上まで、女性は中宮八幡堂まで登ることができるようになりました。

- ⑤かぐや姫を后にと望んだ帝は、姫が富士山に登ったと聞き、はるばる駿河国へやって来て、おじいさんの案内で富士山に登りました。途中、帝が休憩の際に置いた冠が石になり、今では冠石と呼ばれています。富士山の頂でかぐや姫との対面を果たした帝は、とても喜び、かぐや姫とともに暮らしたいと望み、2人で富士山の頂上、釈迦岳のほら穴へと入っていたのです。

※下線部は現存する場所を示す

このストーリーは、富士山にかかわる由来や伝説、信仰の対象となる神仏のことなどを記した富士山縁起という書物のうち、戦国時代から富士市内の今泉の地に所在した富士山東泉院という密教寺院に伝来した「富士山大縁起」（元禄 10 年）に記されていたものです。この資料以外にも、かぐや姫が登場する富士山縁起は鎌倉時代までさかのぼることができ、かつては富士山の祭神はかぐや姫として考えられていたことがわかります。

「富士山大縁起」をはじめ、各種の富士山縁起を受け継いできた東泉院は、別当として富士山南麓の五つの浅間神社（下方五社）を管理していました。これらの神社の中には、かぐや姫やおじいさん（翁）、おばあさん（嫗）を祭神として祀る神社や、かぐや姫が生まれた場所とする神社があります。それとともに、富士市東部に位置する比奈地域を中心に、富士山の南麓には、富士山を舞台にしたかぐや姫のストーリーにゆかりの場所が数多く残されています（構成文化財を参照）。

その背景には、上記の東泉院の存在がありました。かぐや姫の物語に関連する下方五社を中心とした東泉院の活動により、富士山を舞台にしたかぐや姫のストーリーは徐々に地域へと定着し、後に地誌類などの記録や、浮世絵などの絵画の題材としても取り上げられるようになりました。加えて、かぐや姫のストーリーに因んだ、「籠畑」、「赫夜姫」、「見返」といった小字名が名づけられたのです。

その結果、江戸時代から明治時代にかけて、富士山の南麓はかぐや姫のストーリーの舞台として知られるようになり、数多くのゆかりの場所が失われることなく、現代まで受け継がれてきています。あわせて、ゆかりの場所が集中している比奈地域では、地域の人々による各種イベントが実施されています。

また、多数のゆかりの地の存在や各種イベントにより、富士市といえはかぐや姫というイ



メージが定着しつつあり、市内のいたるところで、さまざまなかぐや姫の姿（カントリーサインやマンホールの蓋、側溝の蓋、各種看板、駅弁等）を見ることができます。

言い換えれば、「富士山信仰とかぐや姫」は、各所でみられるかぐや姫の姿を追い求めることにより、月に帰らず、富士山に帰るというユニークな物語を五感で体感できる関連文化財群であるといえるのです。

[関連する文化財群一覧]

指定種別	名称と概要
世界遺産 特別名勝 史跡（国）	富士山 かぐや姫の信仰、物語の中核となる地。風景としても、実際の登山をしても、多くの信仰に関わる史跡が残され、信仰と物語を感じることができる。 江戸時代までは、山頂には、それぞれに仏が宿るとされる八つの峰があり、その一つである釈迦岳のそばにある洞穴へとかぐや姫は入り、富士山の神である浅間大菩薩となったとされる。
世界遺産 史跡（国） ※未指定範囲 含む	<small>おおみや むらやまぐちとざんどう</small> 大宮・村山口登山道 富士山本宮浅間大社を基点とし、村山浅間神社を経て山頂の南側へと達する登山道。かぐや姫の説話が登場する富士山縁起によると、かぐや姫が富士へと登ることにより、男性は山頂まで、女性は山腹の中宮八幡堂まで登ることができるようになったとされる。
その他 （史話と伝承） （未指定）	<small>たきがわじんじゃ</small> 滝川神社 江戸時代以前は、「新宮」、「原田浅間社」などと呼ばれる。東泉院伝来の『五社記』ではかぐや姫が誕生した場所とされ、養父である竹取の翁を祀っていることから、「父宮」、「父の宮」とも呼ばれている。
史跡（市）	<small>たけとりこうえん たけとりづか</small> 竹採公園・竹採塚 かつて竹取の翁が暮らしたと伝わるこの地には、明治初期まで無量寿禅寺があった。臨済宗中興の8祖とされる原宿（沼津市原）の白隠禅師（貞享2(1685)年～明和5(1768)年）が再興したことから、白隠の墓【富士市指定史跡】が祀られている。白隠の話をまとめた「無量寿禅師草創記」では、竹採伝説を取り上げることで、寺の位置するこの地の神聖性を説いている。 現在は公園として整備され、物語に基づいたミニチュアの舞台を堪能できる。また園内には、「竹採姫」と刻まれた竹採塚【富士市指定史跡】がある。
その他 （史話と伝承） （未指定）	<small>かんちくせんげんじんじゃ</small> 寒竹浅間神社 この辺りの地名を権現原といい、かぐや姫を育てた老夫婦、竹採の翁と媼の屋敷があったと伝えられる場所である。竹を編んだり加工したりした竹採の翁は、別名「寒竹の翁」ともいわれた。
その他 （史話と伝承） （未指定）	<small>かこ みかえ さか</small> 囲いの道・見返し坂 かぐや姫が富士山に還る際に通った道を「囲いの道」と呼ぶ。また、道すがら別れを惜しんで振り返った場所を「見返し坂」とよび、小字名が残っている。富士市のかぐや姫伝説を今に伝える場所が今も現存している。
その他 （史話と伝承） （未指定）	<small>いもりせんげんじんじゃ</small> 飯森浅間神社 かぐや姫の下婢（召使の女性）を祀る神社

その他 (史話と伝承) (未指定)	かがみ石 小栗判官と照手姫の伝承が残る場所。照手姫が池の中の石を鏡がわりにして、顔を写したとされるとともに、かぐや姫が顔を写したとする説もあり、かぐや姫ゆかりの場所として認知されている。
有形文化財 (市) ※未指定物件含む	妙善寺観音堂 観音堂に祀られる神像(未指定)は、照手姫像とされるが、かぐや姫像との説もあり、かぐや姫ゆかりの場所として認知されている。
その他 (史話と伝承) (未指定)	中里八幡宮 かつて大綱の里と呼ばれた須津地区中里に位置する。愛鷹山にある中里八幡宮の里宮であり、愛鷹明神(竹取の翁)と犬養明神(竹取の姫)を合祀。
国登録 有形文化財	東泉院跡 現在、吉原公園として整備されているこの地には、明治元(1868)年まで、富士山東泉院という寺院があった。東泉院は、下方五社の別当職を世襲した有力な寺院で、「富士山縁起」が伝来し、富士山南麓におけるかぐや姫に関する説話を伝えている。
その他 (史話と伝承) (未指定)	富知六所浅間神社 江戸時代の書物『駿河国新風土記』に、かぐや姫が祭神として祀られていることが記される。
その他 (史話と伝承) (未指定)	今宮浅間神社 江戸時代以前は、「今宮」、「原田浅間社」などと呼ばれる。東泉院伝来の『五社記』で、養母である竹取の姫を祀っていることから、「母宮」、「母の宮」とも呼ばれている。
その他 (史話と伝承) (未指定)	潤井川 富士宮市上井出付近に端を発し、いくつかの支流を合わせて田子の浦港(かつての吉原湊)から駿河湾へと流れ込んでいる。富士山縁起によれば、富士山へと帰るかぐや姫との別れを嘆き悲しんだ村人たちの流した涙が集まって憂涙川(潤井川)となったとされる。
有形文化財 (史話と伝承) (未指定)	富士山かぐや姫ミュージアム収蔵資料 富士山に帰るかぐや姫の物語の裏付けとなる『富士山大縁起』(元禄10(1697)年)をはじめとする各種の富士山縁起に加え、かぐや姫の物語が取り上げられた地誌や浮世絵を多数所蔵している。 富士山かぐや姫ミュージアムは、上記の資料を活用して、竹取物語の世界を感じてもらうことをコンセプトに展示が行われており、展示を見学することにより、富士山とかぐや姫について知識を深めてから伝承の地を訪れると物語の世界が一層広がる。
その他 (史話と伝承) (未指定)	手児の呼坂 「手児」は美しい娘の意味を持つとされ、かぐや姫を妻にしたいと望む男性が、この坂のあたりからかぐや姫に呼びかけたとされる。
世界遺産 史跡 (国)	村山浅間神社(富士宮市) 12世紀の修行僧である末代上人により創建されたとされ、神仏習合の宗教施設として興法寺と呼ばれていた。末代上人は、富士山の本地仏である大日如来の垂迹神を浅間大菩薩としてとらえ、浅間大菩薩はかぐや姫であるとする縁起を記した。その流れを汲む縁起が当地に伝承されている。
その他 (史話と伝承) (未指定)	中宮八幡堂(富士宮市) 大宮・村山口登山道の道中にある信仰施設の一つ。かつては馬返とも呼ばれ、馬はここまで入ることができた。富士山縁起によると、この場所がかぐや姫と翁が最後の別れとして、歌の交換をおこなった場所とされる。

[関連文化財群配置地図]



© OpenStreetMap contributors

●関連文化財群に関する課題と方針

関連文化財群「富士山信仰とかぐや姫」に関しては、本市ならではのかがや姫の物語に基づく各種イベントがこれまでに継続して実施されてきたことに加え、平成 28(2016)年にリニューアルした富士市立博物館（富士山かぐや姫ミュージアム）において、新たな展示の主要テーマの一つとされたことから、市内外の人々の間にそのストーリーが知られるようになりました。

しかしながら、富士市立博物館において、関連する文化財や歴史文化の展示をおこなっているものの、現地に訪れても説明板の情報が限られており、文化財同士の関連性や位置がわかりづらい、また、市外の文化財も含まれているものの、広域的な文化財の保存・活用についての方向性が固まっていないといった課題があります。

そこで、本関連文化財群では、多様な関係者が参画する富士市文化財保存活用地域計画協議会で聴取した意見に基づきながら、看板の整備や、現地を移動しながらかがや姫の物語を感じることができるようなアプリの開発、関連する文化財を共有する富士宮市との広域的な文化財の保存・活用の検討を進め、富士山信仰とかぐや姫に関連する文化財を中心としたま

ちづくりを目指します。あわせて、令和2(2020)年度から開始された、日本遺産候補地域制度への登録に向けての準備を進めます。

●関連文化財群に関して講じる措置

関連する措置の事業番号	事業名	取組主体					財源	取組年度		
		市民	所有者	団体	学識者	行政		前期 令和4～7 2022～2025	中期 令和8～10 2026～2028	後期 令和11～13 2029～2031
65-2	富士山信仰とかぐや姫ゆかりの地における看板整備		○	○		○	国市			←2027-2031→
	富士山信仰およびかぐや姫ゆかりの地における統一された看板の整備をおこなう(多言語)。また、看板には情報提供アプリへのコードを記載する。									
52-2	地域で実施するかぐや姫に関連する祭り・イベントへの支援	○		○		○	市			←2027-2031→
	地域で実施されている、かぐや姫に関連の姫名の里まつりや、障害者就労支援施設でのイベント等への支援を実施する。									
64-2	かぐや姫の物語や構成文化財の情報をスマートフォン等で体感できるアプリの制作			○		○	国市			←2027-2031→
	かぐや姫の物語や構成文化財の情報・映像について、スマートフォンを看板などに掲示されたコードにかざすと表現することができるようなアプリの開発									
4	周辺市町との広域的な保存・活用の検討					○	市			←2027-2031→
	富士山信仰とかぐや姫のストーリーを共有する富士宮市と広域的な文化財の保存・活用の検討を進める。									

※シ：シティプロモーション課



(3)重点取組以外の関連文化財群の現状と課題、保存・活用の方針

前節で取り上げた重点に取り組みを推進するストーリーを除く、13のテーマについては、まだ、関連文化財の設定ができていませんが、計画の将来的な展望を踏まえ、その課題と今後の方針について記しておきます。また、時期計画では歴史文化の特徴に基づいたテーマごとに詳細にストーリーを紡ぎ、構成文化財のリスト化を進めます。

●富士のふもとで暮らす

浮島沼（浮島ヶ原）周辺の古墳文化

現状と課題

浮島沼周辺の古墳については、概要（所在状況）は把握しているが、詳細な調査が必要な古墳（浅間古墳）や、保存・活用のための整備が必要な古墳（千人塚古墳）が存在しており、積極的な保存・活用の環境に至っていない。

方針

本計画で設定する文化財保存活用区域における取組の中で、古墳の調査や整備をおこない、積極的な保存・活用の環境を整える。あわせて、隣接する沼津市との協働事業（博物館等での展示・シンポジウム等）を通じて、より広い範囲での取組をおこなうための環境を整える。

浮島沼（浮島ヶ原）周辺の生業と景観

現状と課題

浮島沼周辺の生業については、おおむね把握されているが、博物館以外の場所で收藏・保管されている生業に関わる民具類については十分に把握されていない。また、生業と密接に関連する景観（文化的景観）については、文化財としての調査は未実施。

方針

浮島沼周辺の生業に関わる民具類の把握調査をおこなうとともに、文化的景観の把握調査をおこなう。

富士山南麓の古墳文化とその後の地域開発

現状と課題

富士山南麓の古墳や遺跡については、概要（所在状況）は把握しているが、近年の発掘調査に基づく新たな知見を盛り込む必要がある。また、こうした知見についての情報発信が十分に行われているとはいえない。

方針

近年の発掘調査の成果を報告書や博物館での展示等で滞りなく公開するとともに、ガイドブックやパンフレット、ウェブサイト等でストーリーや関連文化財群の情報発信をおこなう。

●富士のふもとで繰り広げられた闘い 今川・武田・北条の戦い

現状と課題 今川・武田・北条の戦いに関連する遺跡（史跡）については、おおむね把握されているが、これらの遺跡（史跡）と歴史資料との関連についての詳細調査は十分に行われていない。また、本市と今川・武田・北条の三氏とのかかわりについて、十分に情報発信されているとはいえない。

方針 遺跡（史跡）と歴史資料との関連についての詳細な調査をおこなうとともに、博物館での展示やガイドブック・パンフレット、ウェブサイト等でストーリーや関連文化財群の情報発信をおこなう。

●富士のふもとで行き交うヒトとモノ 文化が交わる縄文時代

現状と課題 縄文時代の遺跡や、そこから発掘された土器などの遺物については、おおむね把握されているが、他地域からの文化の流入状況を示す具体的な事例のさらなる積み重ねが必要。

方針 本市の遺跡や遺物と、他地域の遺跡や遺物とのさらなる比較調査を行うことで、文化の流入状況についてより明確に明らかにする。

近世東海道と宿場・間宿

現状と課題 東海道と宿場・間宿の位置や歴史についてはおおむね把握されているが、それらに関連する文化財の把握状況は分野によって隔たりがある。また、宿場や間宿を結ぶ街道全体の情報発信は十分とはいえない。

方針 東海道や宿場・間宿に関連する多様な文化財の把握調査をおこなうとともに、博物館での展示やガイドブック・パンフレット、ウェブサイト等でストーリーや関連文化財群の情報発信をおこなう。

富士川舟運と渡船

現状と課題 富士川舟運と渡船に関連する文化財はおおむね把握されており、博物館での常設展示などによる情報発信も行われているが、舟運と渡船の舞台となった岩淵や岩本において受け継がれてきた未調査の歴史資料も確認されている。こうした歴史資料の調査を通じて、より具体的に富士川舟運と渡船の実像を把握する必要がある。

方針 岩淵や岩本において受け継がれてきた未調査の歴史資料の調査をおこなうとともに、その調査成果について、博物館での展示やガイドブック・パンフレット、ウェブサイト等で情報発信をおこなう。

●富士のふもとで災害と生きる

噴火とともに生きた人々

現状と課題	溶岩流の位置や考古資料・歴史資料など、富士山の噴火に関する文化財はおおむね把握されているが、それらに関する情報発信が限られている。
-------	---

方針	ガイドブック・パンフレット、ウェブサイト等で富士山の噴火に関する文化財の情報発信をおこなうとともに、文化財の防災のための意識向上の環境を整える。
----	--

安政東海地震と幕末の国際交流

現状と課題	ディアナ号の関連資料をはじめ、東海地震に関する文化財はおおむね把握されており、広域的な取組としてディアナ号に関連する展示や情報発信がおこなわれている。
-------	---

方針	ガイドブック・パンフレット、ウェブサイト等で東海地震に関する文化財の情報発信をおこなうとともに、文化財の防災のための意識向上の環境を整える。
----	--

暴れ川・富士川を治める

現状と課題	富士川の洪水に関する文化財はおおむね把握されているが、それらに関する情報発信が限られている。
-------	--

方針	ガイドブック・パンフレット、ウェブサイト等で富士川の洪水に関する文化財の情報発信をおこなうとともに、文化財の防災のための意識向上の環境を整える。
----	--

海が迫る！高潮と宿場町

現状と課題	考古資料や歴史資料など、高潮に関する文化財はおおむね把握されているが、それらに関する情報発信が限られている。
-------	--

方針	ガイドブック・パンフレット、ウェブサイト等で駿河湾の高潮に関する文化財の情報発信をおこなうとともに、文化財の防災のための意識向上の環境を整える。
----	--

●富士のふもとで作る

紙のまち富士

現状と課題	富士市の製紙業の歴史やそれに関する遺跡（史跡）についてはおおむね把握されているが、製紙業に関連する未調査の歴史資料や製紙機械、建造物の把握は十分におこなわれていない。
-------	---

方針	製紙業に関連する未調査の歴史資料や製紙機械、建造物の把握をおこなうとともに、その成果について、博物館での展示やガイドブック・パンフレット、ウェブサイト等で情報発信をおこなう。
----	---

●富士のふもとで受け取るめぐみ

富士の茶

現状と課題

富士の茶に関する歴史についてはおおむね把握されているが、製茶業に関する歴史資料や民具、製茶機械、製茶工場等の把握はごく一部に限られている。また、文化的景観としての茶畑景観についての調査は未実施。

方針

製茶業に関する文化財の把握とともに、文化的景観としての茶畑景観についての調査をおこなう。あわせて、その調査成果について、博物館での展示やガイドブック・パンフレット、ウェブサイト等で情報発信をおこなう。

2. 文化財保存活用区域

(1) 文化財保存活用区域の設定の考え方と目的

文化財保存活用区域とは、文化財が特定の区域に集中しており、その周辺環境を含め、それらの文化財の集まりを核として、文化的な空間を創出するための計画的に設定する区域となります。多様な文化財が集中する区域を設定して保存・活用を図ることで、魅力的な空間の創出につながることを期待されます。

本計画では、

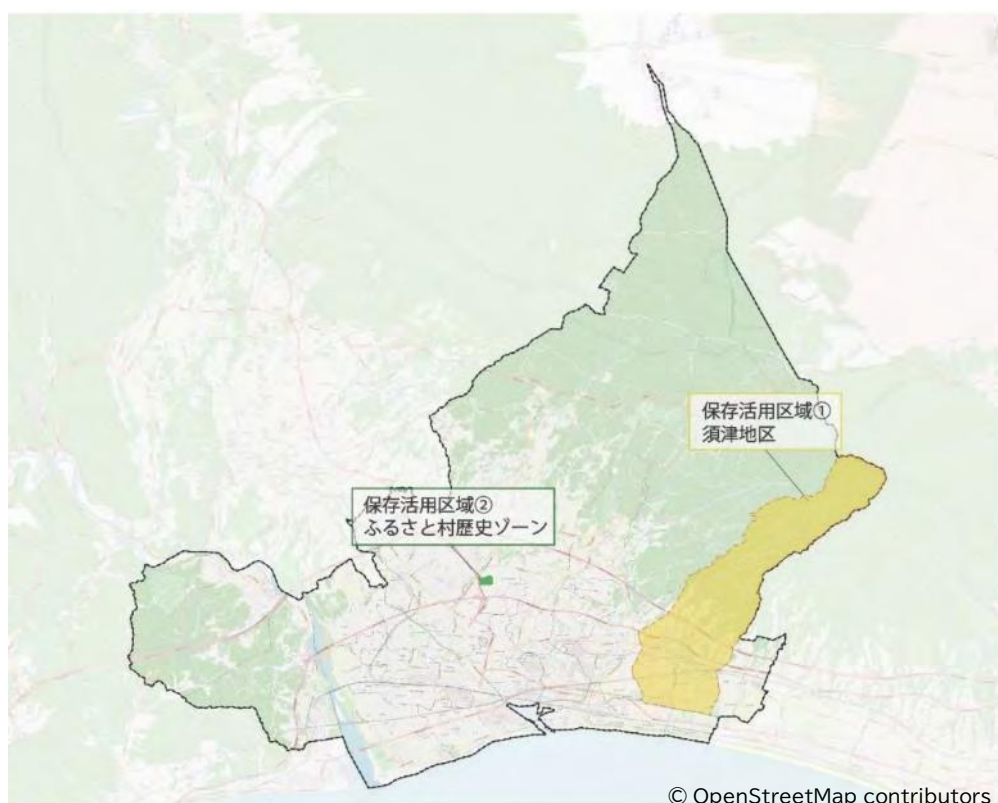
- ①富士市の歴史文化を表象するストーリーとそれに基づく関連文化財群とも関連がある
- ②市内でも特に文化財が集中している
- ③それらの文化財についての把握や調査がおおむね完了している
- ④域内に早急に保存のための取り組みが必要とされる文化財が存在している
- ⑤域内の文化財に対する具体的な保存・活用を担う組織が存在している

という観点から、「須津地区」および「広見公園ふるさと村歴史ゾーン」の2か所を文化財活用区域として設定しました。

両区域における各種の取組を通じて、文化財を活かした魅力的な空間を創出し、多様な人々が交流することにより、活力あるまちづくりへとつなげていくことを目指します。



[文化財保存活用区域]



(2)文化財保存活用区域およびその保存・活用計画

①須津地区

須津地区は、市内東部に位置し、北は愛鷹山、南は浮島ヶ原に挟まれています。愛鷹山の山麓には、国指定史跡の浅間古墳、県指定史跡の琴平古墳、市指定史跡の千人塚古墳をはじめ、4世紀から7世紀後半にかけて、数多くの古墳が築かれ、市内有数の古墳群が形成されています。

また、古墳時代にこの地域を開発した人々の主要な生業は、愛鷹山における馬の飼育や愛鷹山の資源を利用した手工業、浮島沼や駿河湾での漁業、沼縁の小規模な稲作が行われていたことが、古墳から発見された豊富な副葬品や遺跡の遺物から明らかとなっています。

その状況はしばらく変化がなかったようですが、近世に入ると、これらの生業に加えて、浮島沼の干拓と新田開発の試みが盛んに行われるようになります。しかしながら、当時の土木技術では浮島沼の完全な干拓は叶わず、ドブツタと呼ばれる、胸まで沈むような水田での稲作が昭和初期まで実施されていました。こうした過酷な環境で用いられてきた農具類は、県内でも他に例がなく、静岡県の有形民俗文化財に指定されています。

また、浮島沼の北部に位置する集落の人々は、浮島沼における稲作だけではなく、愛鷹山

の裾野を利用した活動（茅場、木材生産等）をおこなってきました。明治時代に入ると、茅場は殖産興業の一環として茶畑となり、現在へといたっています。

結果として、この地域では、浮島沼の水田、集落、愛鷹山の茶畑、植林地といった形で、標高が高くなるにつれて生業が変化していますが、その変化の姿を現地の景観からも知ることができます。

[区域内の文化財一覧]

指定種別	名称と概要
史跡（国）	<small>せんげんこふん</small> 浅間古墳
	国指定史跡の前方後方墳で全長 98m、前方部の幅 40m、高さ 8m、後円部の幅 60m、高さ 11mを測り、静岡県東部最大規模の前期古墳である。現在頂上には浅間神社が祀られる。
史跡（県）	<small>ことひらこふん</small> 琴平古墳
	静岡県指定史跡の円墳で、直径 31m、高さ 5mを測る。頂上には現在金毘羅神社が祀られている。
史跡（市）	<small>せんじんづかこふん</small> 千人塚古墳
	富士市指定史跡の円墳で、直径 20mを測る。7世紀前半から中頃に築かれた古墳で、全長 11.3m、高さ 2.3mを測る大型の横穴式石室から、金銅製の優品を含んだ武器や馬具、須恵器、箱式石棺などが発見されている。石室の規模や副葬品の内容から、同時代に千人塚古墳周辺の古墳群を築いた集団の中でも、特に優れたリーダー格が被葬者の姿として浮かび上がる。
天然記念物（県）	<small>けいしょういん</small> 慶昌院のカヤ
	静岡県指定天然記念物。慶昌院境内に植生しており、目通り約 4.7m、樹高約 20mである。なお慶昌院は曹洞宗寺院で創建年代は不明。
天然記念物（市）	<small>かみやしんめいぐう</small> 神谷神明宮のムク
	市内のムクの中では第一の大木で、目通りの周囲 7.06メートル、高さ約 25メートル。富士市指定天然記念物。
その他（史話と伝承）（未指定）	<small>ことひらぐう</small> 金刀比羅宮
	神谷の金比羅講により勧請された神社。
その他（史話と伝承）（未指定）	<small>とうこうじ</small> 東光寺
	根方街道沿いに位置する寺で、創建年代は不詳。永仁元(1292)年に須津庄の地頭となった羽林中将冷泉隆茂が東光坊を真言宗から日蓮宗に改宗した。(冷泉隆茂は中里八幡宮も創建したと伝えられており、中里3丁目に墓が残っている)
その他（史話と伝承）（未指定）	<small>てんたくじ</small> 天澤寺
	臨済宗妙心寺派の寺院。慶長元(1596)年5月創建、湛室西堂禅師の開山。当初は建長寺派であったともいう。本堂前には寛文4(1661)年8月の六角石燈籠が立つ。
その他（史話と伝承）（未指定）	<small>なかざとはちまんぐう</small> 中里八幡宮
	「駿河記」や「須津村誌」などによると、創建は文永年間(1264-74)、須津庄の地頭羽林中将冷泉隆茂による。戦国時代には、今川・武田・北条の諸将から保護されたとされる。江戸時代から境内にて奉納相撲が挙行され、昭和半ばまで盛大におこなわれた。

指定種別	名称と概要
その他 (史話と伝承) (未指定)	<p><small>かみやふどうそん</small> 神谷不動尊</p> <p>創建は不明であるが、本尊の不動明王が入る厨子の底に明和9(1772)年の墨書があることから、その頃の創建が推測される。神谷不動尊の背後の岸壁の割れ目には、不動明王の使いとされる白蛇が住んでおり、毎年の祭典に現れるとされ、その姿を見たものは幸福になるという。</p>
記念物 (未指定)	<p><small>あしたかようがん</small> 愛鷹溶岩</p> <p>新規愛鷹火山の活動にともなう溶岩流。愛鷹山の東半分に分布し、緩傾斜地形を作っている。神谷の金刀比羅宮と不動尊の背後に露頭を確認できる。</p>
記念物 (未指定)	<p><small>すどこ</small> 須津湖</p> <p>富士八海の一つで、水垢離をおこなう清浄な場とされ、近世を中心に富士講の信者たちが訪れた。</p>
その他 (史話と伝承) (未指定)	<p><small>ねがたかいどう</small> 根方街道</p> <p>今泉の下和田から沼津市熊堂・岡ノ宮あたりまでを指す街道。市内でも根方街道沿いに分布する古墳の数は群を抜いて多く、この街道はかなり古い時代から東西の要路であったことが推察される。</p>
その他 (史話と伝承) (未指定)	<p>つるまき田</p> <p>かつて中里八幡宮の境内にあった松の大木に、毎年秋になると鶴が巣作りをしていた。ある年、巣から落ちた雛を村人が助けた。翌年、村は大飢饉に襲われ村人は種もみまで食べてしまった。次の年のコメが作れずにいたところ、2羽の鶴が飛んできて、田んぼに種を落としていき、村人は救われた。以来、その田んぼを「つるまき田」と呼んでいる。</p>
その他 (史話と伝承) (未指定)	<p><small>あらかま きつね</small> 荒間の狐</p> <p>川尻1丁目にある農業用ため池は、かつては大きな池で周辺を林で囲まれたところであった。その池に人間を化かすのを得意とする「おせん」「おこん」という古狐が住んでおり、多くの人々が化かされたといわれている。</p>
その他 (史話と伝承) (未指定)	<p>おしゃもっさん</p> <p>江尾地区に地元の人が「おしゃもっさん」と呼ぶ小さな祠がある。おしゃもっさんはお尺もちがなまった言葉であり、お尺とは近世以前に検地の際に使われていた間竿のことである。検地は、測り違い等があると罰せられるなど大変厳しいものであったため、村人はこのお尺を大切に扱い、検地が無事に終わると感謝の意を込めてこの祠に祀っていたといわれている。</p>
文化的景観 (未指定)	<p><small>あしたかやまさんろく ちゃばたけ</small> 愛鷹山山麓の茶畑</p> <p>愛鷹山の山麓、沢と沢に挟まれた尾根上には、明治初期から開かれた茶畑が広がる。茶畑から南を眺めると、眼下に集落と水田、駿河湾をはさんで伊豆半島の景観が広がる。また、集落内には、茶畑で摘まれた茶葉を加工する製茶工場が点在している。</p>
文化的景観 (未指定)	<p><small>うきしまがはら すいでん</small> 浮島ヶ原の水田</p> <p>江戸時代から干拓・圃場整備が実施されてきた浮島ヶ原には、現在、水田が広がる。水田からは、愛鷹山、富士山が一望でき、江戸時代に描かれた浮世絵と同じような景観が広がる。</p>
有形 民俗文化財 (県)	<p><small>うきしまぬましゅうへん のうこうせいさんようぐ</small> 浮島沼周辺の農耕生産用具</p> <p>かつての浮島ヶ原は、ドブツタと呼ばれるような湿田も多く、胸まで泥に浸かって田植えをするような状況が長くつづいた。こうした湿田でも作業しやすいように工夫された農具が静岡県指定の有形民俗文化財となっている。</p>

[須津地区の拡大区域図]



愛鷹溶岩の分布：富士山世界遺産センター提供「富士山の地形・地質と湧水の分布」を参考に作成
茶畑・水田：20万分の1土地利用図（国土地理院）、Open street map を参照して作成

●文化財保存活用区域に関する課題と方針

本文化財保存活用区域に関しては、令和2年度に作成した富士市指定史跡千人塚古墳保存・活用計画の中で、市街地から各文化財へのアクセス方法が限られている、誘客に向けたインフラが限られている、道幅が狭く、見学の際の安全性が懸念される場所がある、見学の拠点となる施設がないといった課題が示されています。同計画では、こうした課題を解決し、区域内の文化財を活用した各種取組が示されており、同計画に基づきながら事業を進めます。

また、同計画で示された取組を進めるにあたっては、地域の歴史や文化について調査・研究・普及について熱心に取り組んでいる「須津ふるさと愛好会」（ふじのくに文化財保存・活用推進団体）等の諸団体が加盟し、組織されている須津まちづくり協議会と協働しながら進めることとします。

[文化財保存活用区域に関して講じる措置] (富士市指定史跡千人塚古墳保存・活用計画に基づく)

関連する措置の事業番号	事業名	取組主体					財源	取組年度		
		市民	所有者	団体	学識者	行政		前期 令和4～7 2022～2025	中期 令和8～10 2026～2028	後期 令和11～13 2029～2031
18 27	須津古墳群の保存事業(1期) ・千人塚古墳整備(用地取得、予備調査、石室解体等調査、復元工事等) ・浅間古墳予備確認調査	○	○	○	○	○	国市	← 2022-2026 →		
27	須津古墳群の保存事業(2期) ・浅間古墳保存・活用計画策定、浅間古墳関連地の公有化 ・須津古墳群分布調査	○	○	○	○	○	国市	← 2027-2031 →		
62	須津地区をめぐる周遊ルートの設定と周知 車両と徒歩それぞれについて周遊ルートを設定し、マップを作成する。			○		○	国市	← 2022-2023 →		
65	須津地区における看板整備 須津地区における統一された看板の整備をおこなう(多言語)。また、看板には情報提供アプリへのコードを記載する。			○		○	国市	← 2022-2025 →		
52-3	地域で実施する須津古墳群に関連するイベントへの支援 地域で実施されている古墳めぐり、地区文化祭などのイベント等への支援を実施する			○		○	市	← →		
64-3	須津古墳群の情報をスマートフォン等で体感できるアプリの制作 須津古墳群や須津地区の文化財の情報・映像について、スマートフォンを看板などに掲示されたコードにかざすと表現することができるようなアプリの開発をおこなう。			○		○シ	国市	← 2022-2025 →		

※シ：シティプロモーション課

② 広見公園ふるさと村歴史ゾーン

広見公園ふるさと村歴史ゾーンには、市内各所に所在した古墳や歴史的建造物(8棟)が移築復原されるとともに、発掘調査の成果から復元された古代の建物、移築された石造文化財などがあり、富士市立博物館(富士山かぐや姫ミュージアム)と合わせて見学することにより、富士市の歴史や文化について深く知ることができる環境が整えられています。

加えて、平成20(2008)年に移築復原された旧稲垣家住宅(県指定有形文化財)は、活用を前提とした整備が実施され、「文化財を活用したユニークベニューハンドブック」(文化庁)にも掲載された演奏会や、かまどや囲炉裏を活用した炊飯体験、映画やドラマなどのロケ地での利用がおこなわれるなど、公園のみならず、広見地区全体の賑わいの創出につながっています。

[区域内の文化財一覧]

指定種別	名称と概要
有形文化財 (県)	<small>きゅういながきけじゅうたく</small> 旧稲垣家住宅 文化元(1804)年に建築された養蚕農家の住宅。建築年代がわかるものの中では、市内最古。養蚕農家の工夫が随所にみられる。
その他 (未指定)	<small>よこざわこふん</small> 横沢古墳 6世紀末から7世紀初めにかけて造られた円墳。広見公園に隣接する道路開発に伴う発掘調査を経て、公園内に移築復原された。古墳の大きさや副葬品の内容から、現在の伝法地区一帯をおさめた有力者の古墳と考えられている。
その他 (未指定)	<small>ひがしだいらいせきたかゆかそうこ</small> 東平遺跡高床倉庫 古墳時代から平安時代の大集落跡である東平遺跡の発掘調査に基づいて復元された掘立柱の倉庫。東平遺跡からは、このような掘立柱の建物跡が90棟以上発見されている。
その他 (未指定)	<small>ひがしだいらいせきたてあなじゅうきょ</small> 東平遺跡竪穴住居 東平遺跡の発掘調査で確認された420軒以上の竪穴住居のうち、火災で焼失した住居跡を基に復元されたもの。住居内の発掘調査では、土器や木製の皿、武器などが多く出土していることから、集落の中心的な役割を持った人物が住んでいたと考えられている。
有形文化財 (市)	<small>とよだいかんうえまつけじゅうたく</small> 樋代官植松家住宅 富士山麓の地に飲料水や灌漑用水を供給する鷹岡伝法用水路を管理していた植松家の居宅。植松家は用水路だけではなく、沢を越える樋も含めて管理していたことから、樋代官と呼ばれていた。戦国時代から江戸時代にかけての用水奉行であり、多摩川周辺を潤した二ヶ領用水や六郷用水の開発を指揮した小泉次大夫の生家が植松家であるとされる。
有形文化財 (市)	<small>とよだいかんながやもん</small> 樋代官長屋門 樋代官植松家の表門。江戸時代末期のものと伝えられ、市内で現存する唯一の長屋門。
有形文化財 (市)	<small>きゅうまつながけじゅうたく</small> 旧松永家住宅 東海道の面した集落、平垣の豪農であった松永家の居宅の一部。安政4(1857)年に建てられたもので、武家風様式を残す貴重な建物。
有形文化財 (市)	<small>げんせんしゃ</small> 原泉舎 嘉永元(1848)年、市内今泉の妙延寺の土蔵として建てられたが、明治6(1873)年からは、現在の富士市立今泉小学校の前身、原泉舎の仮教場として使われた。天井には墨絵の龍が描かれ、入口の左右には、中国二十四孝の物語を題材にした漆喰のこて絵が残る。
有形文化財 (市)	<small>ちょうほうかん</small> 眺峰館 明治25(1892)年に吉原西本町(現在の吉原2丁目)の鈴木義三が料理店の玄関として建てたもの。正八角形の三階建ての造りで、避雷針付きのトタン屋根を持つ。三階からの富士山の眺めが素晴らしかったことから「眺峰館」と呼ばれ人々に親しまれてきた。
有形文化財 (市)	<small>すぎうらいん</small> 杉浦医院 大正8(1919)年、吉原伝馬町(現在の中央町1丁目)に建てられたもの。一見すると洋風の建物だが、2階には和室があり、1階が医院として使われた。この医院は初代の杉浦秀宣氏が開院して以来、昭和63(1988)年に閉院されるまでの70年間にわたり、地域の医療活動を担った。

指定種別	名称と概要
有形文化財 (未指定)	<p>旧独楽荘石蔵 <small>きゅうどくらくそういしくら</small></p> <p>この石倉は、伊藤博文の養子、伊藤博邦公爵が興津（現静岡市）に設けた別荘、独楽荘の敷地内に、大正9（1920）年頃に建てられたもの。その後、市内水戸島の斉藤氏が所有するところとなり、伊藤家ゆかりの石倉として長く斉藤氏の邸内に保存されていた。</p>
有形文化財 (未指定)	<p>道しるべ</p> <p>現在の富士市の中央部に位置した吉原宿は、東海道の宿場であっただけではなく、大宮町（現在の富士宮市）へと至る大宮街道、現在の沼津市へと至る根方街道、現在の裾野市へと至る十里木街道など、いくつかの街道の起点となる交通のななめであった。各街道には、行き交う人々の利便に供するため道しるべが建てられたが、道路の拡張などにより、現地での保存が困難になったものが、ふるさと村歴史ゾーン内に移築されている。</p>
民俗文化財 (市)	<p>富士山頂に奉納された鳥居 <small>ふじさんちよう ほうのう とりい</small></p> <p>市内岩淵の集落は、かつて富士川の渡船の仕事を担っており、船の材料となる木材を富士山中から手に入れていたことから、その返礼として、「鳥居講」という講を組織して、12年に一度、申の年に白木の鳥居を富士山頂に奉納している。</p> <p>この行事は、江戸時代から現在まで途絶えることなく受け継がれており、平成28（2016）年の奉納の際に抜かれた鳥居（平成16年奉納）が、ふるさと村歴史ゾーン内に移築されている。</p>

[広見公園ふるさと村歴史ゾーンの区域図]



●文化財保存活用区域に関する課題と方針

広見公園ふるさと村歴史ゾーンには、多くの建造物が移築復原（復元）されているとはいえ、耐震強度の不足等の問題から、活用が可能な建造物が限られており、ふるさと村歴史ゾーン全体の活用が図られているとはいえない状況です。現在十分な活用ができていない建造物に関しては、保存・活用計画を策定したうえで、計画的な耐震補強工事を実施します。

また、市内には、老朽化や適切な管理のためにふるさと村歴史ゾーンへの移築復原が望ましい状況にある歴史的建造物があり、この建造物の整備を計画的に進めます。

加えて、こうした建造物の活用のノウハウを蓄積することにより、市内に所在する他の歴史的建造物の活用にも活かし、市内外の多くの方々に興味を持っていただくことで、将来的な保存につなげていく機運を高めます。

[文化財保存活用区域に関して講じる措置]

関連する措置の事業番号	事業名	取組主体					財源	取組年度		
		市民	所有者	団体	学識者	行政		前期 令和4～7 2022～2025	中期 令和8～10 2026～2028	後期 令和11～13 2029～2031
70	旧順天堂田中歯科医院診療所兼主屋の移築復原		○			○	国市		←→ 2027-2028	
	所有者による管理が困難となり、本市が管理団体となった旧順天堂田中歯科医院診療所兼主屋（国登録文化財）については、老朽化が進み、早急な修理や適切な管理体制が求められていることから、文化庁の補助事業である地域文化財総合活用推進事業（地域のシンボルの整備等）や地方創生交付金の活用も視野に入れ、さまざまな形で活用することを前提に、ふるさと村歴史ゾーン内への移築復原を進める。									
71	広見公園ふるさと村歴史ゾーン内の保存・活用計画の策定				○	○み	市		←→ 2025-2026	
	ふるさと村歴史ゾーン内に移築復原（復元）されている建造物群のうち、耐震強度の不足といった問題から、活用することができる施設は限られている。耐震強度が不足している建造物に対して、耐震補強工事を実施することで、さらなる活用が可能となり、ゾーン内のみならず、地区全体の活性化にもつながるが、計画的に事業を進めていくために、ゾーン内の建造物群に関しての保存活用計画を作成する。									
72	広見公園ふるさと村歴史ゾーン内建造物耐震工事				○	○施	国市			←→ 2027-2031
	保存活用計画に基づき、積極的な活用のために計画的に建造物の耐震工事を実施する。									
52-4	広見公園ふるさと村歴史ゾーンを活用したイベントの支援	○		○		○み	市			←→
	市民や団体が実施する、広見公園を活用したイベントを支援し、公園を中心とした地域の賑わいを創出する。									

※み：みどりの課、施：施設保全課



